『大衆文芸』（第一次）総目次

日本文学／准教授　原　卓史

【キーワード】
・二十一日会、報知新聞、メディア・ミックス、大衆文学、時代小説

【凡例】

・本資料は、雑誌『大衆文芸』（第一期）の総目次である。
・目次は原則として、内題の記載に従った。ただし、目次に即して適宜補充したところがある。
・旧漢字、俗字、異体字などは原則として常用漢字に改めた。歴史的仮名遣いについてはそのままとした。
・挿絵画家は誌面からの読み取りが可能な限り記載した。
・頁数は各作品の冒頭頁を記載した。
・使用した資料は、架蔵資料、マイクロフィッシュ版『大衆文芸』（雄松堂フィルム出版）である。

【総目次】

『大衆文芸』創刊号　第一巻第一号　一九二六（大正一五）年一月一日（注一）

正木不如丘、画・執筆者不記「津波」　二
長谷川伸、画・井川洗涯「敵討たれへ」　三八
小酒井不木「クロス・ワード・パヅルと探偵小説」　七〇
土師清二、画・小田富弥「瞽文大患録」　七二
小酒井不木、画・伊藤幾久造「人工心臓」　一〇六
国枝史郎、画・河野通勢「五右衛門と新左」　一三六
国枝史郎「信玄雑感」　一六一
本山荻舟、画・執筆者不記「妖女人面人心」　一六二
平山蘆江、画・吉川翠渓「唐人船」　一九二
平山蘆江「ひとりごと」　二二一
直木三十三、画・八幡憲一「新説天一坊」　二二二
矢田挿雲、画・牛島一水「江戸から東京え」　二五二
白井喬二、画・清水三重三「獅子面のぞき」　二六八
池内生（注二）「編集後記」　二九〇
「大衆文芸往来」　二九〇
挿絵……井川洗涯、小田富弥、伊藤幾久造、河野通勢、太田雅光、吉川翠渓、八幡憲一、牛島一水、清水三重三

一九二五年一一月二五日印刷　一九二六年一月一日発行
発行兼編集者　久保田朝興（東京市丸の内有楽町二―一　報知ビルデング内）
発行所　二十一日会（東京市丸の内報知ビルデング）
印刷所　日東印刷（東京市本郷区真砂町三六番地）
印刷者　左手薫（東京市本郷区真砂町三六番地）
定　価　五〇銭
形　態　A五版、二九〇頁、図版、広告、

『大衆文芸』二月号　第一巻第二号　一九二六（大正一五）年二月一日

本山荻舟、画・牛島一水「風流試膽会」　二
平山蘆江、画・吉川翠渓「日清戦争――唐人船――」二の巻　三〇
正木不如丘、画・大井九三「お梅」　六〇
執筆者不記「世相ビルデング案内図」　九三
直木三十三「雑音」　九四
平山蘆江「今年の芝居」　九八
正木不如丘「新聞紙上の医事」　一〇〇
国枝史郎「名古屋芸界」　一〇二
国枝史郎、画・八幡憲一「山窩の恋」　一〇四
矢田挿雲、画・太田雅光「江戸から東京え」　一二八
土師清二、画・岩田専太郎「ふだらく船」　一五六
江戸川乱歩「探偵小説は大衆文芸か」　一九〇
土師清二「道頓堀での独り言」　一九二
白井喬二「独楽の話」　一九六
長谷川伸、画・河野通勢「老雑兵物語」　一九八
小酒井不木、画・伊藤幾久造「三つの痣」　二三二
「大衆文芸往来」　二五一
池内生「編集後記」　二五二

挿絵……牛島一水、八幡憲一、日名子実三（注三）、伊藤幾久造、吉川翠渓、大井九三、河野通勢、太田雅光、岩田専太郎

一九二五年一二月二五日印刷　一九二六年二月一日発行
発行兼編集者　久保田朝興（東京市丸の内有楽町二―一報知ビルデング内）
発行所　二十一日会（東京市丸の内報知ビルデング）
発売元　報知新聞社出版部（東京市丸の内有楽町二―一）
印刷所　日東印刷（東京市本郷区真砂町三六番地）
印刷者　左手薫（東京市本郷区真砂町三六番地）
定　価　五〇銭
形　態　A五版、二五二頁、図版、写真、広告

『大衆文芸』三月号　第一巻第三号　一九二六（大正一五）年三月一日

平山蘆江、画・吉川翠渓「猶太の狗――唐人船三の巻――」　二
示羊三「温古雑記抄」　三三
江戸川乱歩、画・伊藤幾久造「探偵小説　灰神楽」　三四
土師清二、画・岩田専太郎「白い手の笑靨」　五六
正木不如丘「生活を面白くする」　八一
本山荻舟「大衆料理講座」　八四
小酒井不木「毒二題」　八六
未署名「髪結の始まり」　八九
矢田挿雲、画・橘さゆめ「江戸から東京え」　九〇
国枝史郎、画・名取春仙「道真と時平」　一一八
長谷川伸、画・太田雅光「ひまんの話」　一四八
直木三十五「「去来三代記」予告話」　一七六
示羊三「温故雑記抄」　一七九
平山蘆江「新聞の裏」　一八〇
土師清二「元禄年間大阪雑事／宝永年間大阪雑事」　一八二

正木不如丘、画・大井九三「猿語人語」　一八四
本山荻舟、写真（彫）・日名子実三「天文比翼塚」　二〇四
白井喬二「銭番論語」　二二八
「大衆文芸往来」　二四一
池内祥三「編集後記」　二四四
挿絵……河野通勢、吉川翠渓、伊藤幾久造、岩田専太郎、橘さゆめ、名取春仙、太田雅光、大井九三、日名子実三

一九二五年一月二五日印刷　一九二六年三月一日発行
発行兼編集者　久保田朝興（東京市丸の内有楽町二―一報知ビルデング内）
発行所　二十一日会（東京市丸の内報知ビルデング）
発売元　報知新聞社出版部（東京市丸の内有楽町二―一）
印刷所　日東印刷（東京市本郷区真砂町三六番地）
印刷者　左手薫（東京市本郷区真砂町三六番地）
定　価　五〇銭
形　態　A五版、二四四頁、図版、写真、広告

『大衆文芸』四月号　第一巻第四号　一九二六（大正一五）年四月一日

長谷川伸、画・太田雅光「旅の者心中」　二
平山蘆江、画・吉川翠渓「魂迎へ―唐人船―」四の巻　三二
正木不如丘、画・八幡憲一「雉子も鳴かずば」　五四
直木三十五「雑音」　八五
国枝史郎「木曾寸景」　八八
土師清二「大阪乗り物ばなし」　九〇
長谷川伸「漫々亭抄」　九二
土師清二、画・執筆者不記「継母と二人の子」　九四
小酒井不木、画・伊藤幾久造「直接証拠」　一三〇
国枝史郎、画・水島爾保布「岷山の隠士」　一五一
平山蘆江「話相手」　一七四
本山荻舟「信長の舌＝大衆料理講座＝」其二　一七六
江戸川乱歩「探偵叢話」　一七八
示羊三「温故雑記抄」　一八一
本山荻舟、画・日名子実三「飯盛山連歌」　一八二
矢田挿雲、画・橘さゆめ「江戸から東京え」　二一〇
白井喬二「銭番論語」（承前）　二三九
「大衆文芸往来」　二四七
池内祥三「編集後記」　二五二
挿絵……河野通勢、太田雅光、吉川翠渓、八幡憲一、伊藤幾久造、水島爾保布、日名子実三、橘さゆめ

一九二五年二月二五日印刷　一九二六年四月一日発行
発行兼編集者　広瀬憙六（東京市丸の内有楽町二―一報知ビルデング内）
発行所　二十一日会（東京市丸の内報知ビルデング）
発売元　報知新聞社出版部（東京市丸の内有楽町二―一）
印刷所　日東印刷（東京市本郷区真砂町三六番地）
印刷者　左手薫（東京市本郷区真砂町三六番地）
定　価　五〇銭
形　態　A五版、二五二頁、図版、広告

『大衆文芸』五月号　第一巻第五号　一九二六（大正一五）年五月一日

小酒井不木、画・大沢鉦一郎「死の接吻」　二
土師清二、画・小田富弥「直家の殺し方」　二三
長谷川伸、画・柴田春光「敵討邯鄲枕」　五〇
直木三十五「雑音」　八二
長谷川伸「冷たく云へば」　八五
本山荻舟「湯豆腐＝大衆料理講座＝」其三　八八

平山蘆江「間」　九〇
平山蘆江、画・吉川翠渓「観世音像―唐人船―」五の巻　九四
本山荻舟、舞台装置人形意匠・太田雅光「異曲伊勢物語」　一二九
正木不如丘、画・伊藤幾久造「本人の登場」　一四四
女酒花（同人課題）
長谷川伸「延寿の狂薬」　一七二
小酒井不木「女、花」　一七五
土師清二「悪標本記」　一七七
本山荻舟「花、酒、女」　一七九
国枝史郎「花いろ〳〵」　一八二
直木三十五「猶未だ、女なら」　一八三
平山蘆江「池内君へ」　一八六
白井喬二「酒は白鷹」　一八八
矢田挿雲「一茶と花」　一八八
直木三十五「去来三代記」　一九二
矢田挿雲、画・橘さゆめ「江戸から東京え」　二一六
編集子「大衆文芸往来」　二四二
池内祥三「編集後記」　二四四
挿絵……河野通勢、大沢鉦一郎、小田富弥、柴田春光、吉川翠渓、太田雅光、伊藤幾久造、橘さゆめ

一九二六年三月二五日印刷　一九二六年五月一日発行
発行兼編集者　広瀬憙六（東京市丸の内有楽町二―一報知ビルデング内）
発行所　二十一日会（東京市丸の内報知ビルデング）
発売元　報知新聞社出版部（東京市丸の内有楽町二―一）
印刷所　日東印刷（東京市本郷区真砂町三六番地）
印刷者　左手薫（東京市本郷区真砂町三六番地）
定　価　五〇銭
形　態　A五版、二四四頁、図版、広告

『大衆文芸』六月号　第一巻第六号　一九二六（大正一五）年六月一日

国枝史郎、画・河野通勢「穏亡堀」　二
甲賀三郎、画・水島爾保布「古名刺奇譚」　一八
長谷川伸、画・柴田春光「世に出ぬ豪傑」　四七
正木不如丘「虫のいゝ予告」　八一
土師清二「ヘツポコ記者」　八四
本山荻舟「鱈の味＝大衆料理講座＝」其四　八六
小酒井不木「犯罪哀話」　八八
土師清二、画・清水三重三「橋の下の義民」　九四
正木不如丘、画・伊藤幾久造「光り苔」　一二四
示羊三「江戸雑記」　一四七
平山蘆江、画・平山清郎「畜生成仏―唐人船―」六の巻　一四八
処女作の思ひ出（読者課題）
長谷川伸「ぽかんと書いた」　一七九
正木不如丘「「診療簿余白」経緯」　一八一
平山蘆江「青銅の牛」　一八二
小酒井不木「京都日出新聞」　一八四
国枝史郎「処女作不愉快話」　一八六
本山荻舟「盲蛇の『膝栗毛』から」　一八七
江戸川乱歩「私の探偵趣味」　一八九
直木三十五「課題に答ふ」　一九二
矢田挿雲、画・橘さゆめ「江戸から東京え」　一九四
直木三十五「去来三代記」　二一一
本山荻舟、舞台装置人形意匠・太田雅光「花桐の少将―続異曲伊勢物語―」　二三〇
編集子「大衆文芸往来」　二四五

池内祥三「編集後記」　二四八

挿絵……河野通勢、水島爾保布、柴田春光、清水三重三、伊藤幾久造、平山清郎、橘さゆめ、太田雅光

一九二六年四月二五日印刷　一九二六年六月一日発行
発行兼編集者　広瀬憙六（東京市丸の内有楽町二―一報知ビルデング内）
発行所　二十一日会（東京市丸の内報知ビルデング）
発売元　報知新聞社出版部（東京市丸の内有楽町二―一）
印刷所　日東印刷（東京市本郷区真砂町三六番地）
印刷者　左手薫（東京市本郷区真砂町三六番地）
定　価　五〇銭
形　態　A五版、二四八頁、図版、広告

『大衆文芸』七月号　想思篇　第一巻第七号　一九二六（大正一五）年七月一日

小酒井不木、画・大沢鉦一郎「狂女と犬」　二
土師清二、画・執筆者不記「朝鮮事件覚書」　一九
本山荻舟、画・太田雅光「大御所命乞」　三四
正木不如丘、画・伊藤廉「勘当―光り苔―」（二）　五七
矢田挿雲、画・牛島一水「江戸から東京え」　八二
本山荻舟「小鍋立＝大衆料理講座＝」其五　九六
矢田挿雲「処女作の追憶」　九七
土師清二「思ひ出すまゝ」　一〇〇
平山蘆江「酒井野梅先生」　一〇三
想思篇（特別読物）
長谷川伸、画・河野通勢「おもちやの女」　一〇六
土師清二、画・清水三重三「貞操」　一三四
平山蘆江、画・自画「色即是空」　一四六
小酒井不木「変な恋」　一五六
本山荻舟「月ならば十三夜」　一六〇
矢田挿雲「初恋の匂」　一六三
最も気に適つた土地（同人課題）
小酒井不木「最も気に適つた土地」　一六五
直木三十五「「土地」に就て答ふ」　一六六
土師清二「奈良」　一六八
国枝史郎「大阪、信州、名古屋」　一七〇
本山荻舟「いろ〳〵の土地」　一七二
平山蘆江「思ひ出す儘」　一七四
矢田挿雲「住めば都」　一七七
長谷川伸「その土地の人次第」　一七九
池内祥三「春の琵琶湖畔と秋の嵯峨野」　一八一
江戸川乱歩「お勢登場」　一八二
平山蘆江、画・自画「何阿玉―唐人船―」七の巻　二〇〇
編集子「大衆文芸往来」　二三八
池内祥三「編集後記」　二四〇

挿絵……大沢鉦一郎、太田雅光、伊藤廉、牛島一水、河野通勢、清水三重三、平山蘆江

一九二六年五月二五日印刷　一九二六年七月一日発行
発行兼編集者　広瀬憙六（東京市丸の内有楽町二―一報知ビルデング内）
発行所　二十一日会（東京市丸の内報知ビルデング）
発売元　報知新聞社出版部（東京市丸の内有楽町二―一）
印刷所　日東印刷（東京市本郷区真砂町三六番地）
印刷者　左手薫（東京市本郷区真砂町三六番地）
定　価　五〇銭
形　態　A五版、二四〇頁、図版、広告

『大衆文芸』八月号　第一巻第八号　一九二六（大正一五）年八月一日

土師清二、画・伊藤幾久造「重助の場合」　二
いもさく「わしが唄」　二五
本山荻舟、画・太田雅光「上臈流罪―続大御所命乞―」　二六
長谷川伸、画・柴田春光「蝙蝠安」　四六
池田林儀「若返りの水車小屋」　七九
白井喬二「朝日ヶ丘より」　八二
平山蘆江「屁理屈」　八五
矢田挿雲「江戸から東京え」　八八
平山蘆江、画・自画「美しき母―唐人船―」八の巻　九六
池内祥三「『花骨牌』に就いて」　一二九
湊邦三、画・河野通勢「花骨牌」（推薦作）　一三〇
直木三十五「去来三代記申訳篇」　一六九
長谷川伸「二三臍も不咬」　一七一
土師清二「正徳享保年間大阪雑事」　一七四
本山荻舟「折詰の鯛＝大衆料理講座＝」其六　一七六
三上於菟吉、脚色・監督・直木三十五、撮影・河上勇喜「シナリオ　日輪」後篇七巻（連合映画芸術家協会作品）　一七八
正木不如丘、画・八幡白帆「借金順礼―光り苔―」（三）　一九七
夜の旅（同人課題）
本山荻舟「旅の女三態」　二一四
長谷川伸「或る経験」　二二八
国枝史郎「夜行列車」　二三一
土師清二「眠り過ぎる」　二三四
平山蘆江「平穏無事」　二三八
小酒井不木「夜行列車の恐怖」　二四一
正木不如丘「座席の御難」　二四三
「大衆文芸往来」　二四六
池内祥三「編集後記」　二四八

挿絵……平山清郎、伊藤幾久造、太田雅光、柴田春光、平山蘆江、河野通勢、八幡白帆
一九二六年六月二五日印刷　一九二六年八月一日発行
発行兼編集者　広瀬憙六（東京市丸の内有楽町二―一報知ビルデング内）
発行所　二十一日会（東京市丸の内報知ビルデング）
発売元　報知新聞社出版部（東京市丸の内有楽町二―一）
印刷所　日東印刷（東京市本郷区真砂町三六番地）
印刷者　左手薫（東京市本郷区真砂町三六番地）
定　価　五〇銭
形　態　A五版、二四八頁、図版、広告

『大衆文芸』九月号　第一巻第九号　一九二六（大正一五）年九月一日

白井喬二、画・岡田七蔵「目明き藤五郎」　二
小酒井不木、画・大沢鉦一郎「メヂユーサの首」　三二
長谷川伸、画・柴田春光「舶来巾着切」　五〇
江戸川乱歩「乱歩打開け話」　七七
土師清二「恥・色情・猫」　八二
本山荻舟、画・太田雅光「北地処女考」　八六
いもさく「わしが唄」　一一一
土師清二、画・河野通勢「鎌倉三代物語」　一一二
国枝史郎、画・伊藤幾久造「物語二つ」　一四四
池田林儀「ある軽業師の告白」　一五二
本山荻舟「しよツつる＝大衆料理講座＝」其七　一五八
小村欣一、尾佐竹猛、山本久三郎、田中智学、中村芝鶴、桜井忠温、鶴見祐輔、笹川臨風「名士の声」　一六〇
矢田挿雲「江戸から東京え」　一六二

直木三十五「去来三代記―発端篇」四　一六九
平山蘆江、画・自画「日見峠―唐人船―」九の巻　一八八
苦労の思ひ出（同人課題）
土師清二「西園寺公の顔」　二一五
本山荻舟「食へない苦労」　二一七
長谷川伸「隧道崩壊」　二二六
矢田挿雲「苦労の一つ」　二二九
平山蘆江「発表禁止」　二三三
小酒井不木「苦労の思ひ出」　二三五
直木三十五「苦労、苦労、苦労」　二三七
「大衆文芸往来」　二四二
池内祥三「編集後記」　二四八
表紙と挿絵
表紙「紫式部と高尾」……河野通勢
挿絵……岡田七蔵、大沢鉦一郎、柴田春光、太田雅光、河野通勢、伊藤幾久造

一九二六年七月二五日印刷　一九二六年九月一日発行
発行兼編集者　川畑玄二（東京市丸の内有楽町二―一報知ビルデング内）
発行所　二十一日会（東京市丸の内報知ビルデング）
発売元　報知新聞社出版部（東京市丸の内有楽町二―一）
印刷所　共同印刷（東京市小石川区久堅町一〇八）
印刷者　大橋光吉（東京市小石川区久堅町一〇八）
定　価　五〇銭
形　態　A五版、二四八頁、図版、広告

『大衆文芸』一〇月号　現代畸人号　第一巻第一〇号　一九二六（大正一五）年一〇月一日

本山荻舟、画・名取春仙「二度あること」　二
土師清二、画・小田富弥「崇禅寺馬場」　二二
直木三十五「去来三代記―発端篇」五　五一
閑養軒「退屈者散歩」　七八
長谷川伸「偽物一瞥」　八一
江戸川乱歩「鏡地獄」　八四
国枝史郎「手」　一〇一
長谷川伸、画・河野通勢「錦の褌」　一〇六
木村荘八、木村綿花、福地信世、宮田修、藤原咲平、下村海南「名士の声」　一一〇
平山蘆江、画・自画「唐人船」十の巻、十一の巻　一三〇
いもさく「わしが唄」　一八一
本山荻舟「鍋いろ〳〵＝大衆料理講座＝」其八　一八二
白井喬二「朝日ケ丘より」　一八四
現代畸人（特別読物）
本山荻舟「またぎき畸人伝」　一八七
土師清二「坂田名人断片」　一九二
直木三十五「身辺変事」　一九六
長谷川伸「生ける殉死」　二〇〇
小酒井不木、画・大沢鉦一郎「新案探偵法」　二〇二
矢田挿雲「江戸から東京え」　二一九
編集子「大衆文芸往来」　二三〇
池内祥三「編集後記」　二三二
表紙と挿絵
表紙「琴棋書画之図」……河野通勢
挿絵……名取春仙、小田富弥、河野通勢、大沢鉦一郎、平山蘆江

一九二六年八月二五日印刷　一九二六年一〇月一日発行
発行兼編集者　川畑玄二（東京市丸の内有楽町二―一報知ビルデング内）
発行所　二十一日会（東京市丸の内報知ビルデング）

発売元　報知新聞社出版部（東京市丸の内有楽町二―一）
印刷所　共同印刷（東京市小石川区久堅町一〇八番地）
印刷者　大橋光吉（東京市小石川区久堅町一〇八番地）
定　価　五〇銭
形　態　A五版、二三二頁、図版、広告

『大衆文芸』一一月号　第一巻第一一号　一九二六（大正一五）年一一月一日

正木不如丘、画・大井九三「初恋」　二
土師清二、画・伊藤幾久造「小説以上」　三三
湊邦三、画・河野通勢「艶書殺人」　四六
本山荻舟「野菜礼讃＝大衆料理講座＝」其九　八二
平山蘆江「野梅三週忌」　八四
池内祥三「『身替り』の作者について」　八九
本山荻舟、画・太田雅光「仇討共倒れ」　九〇
平山蘆江、画・自画「河内山宗俊」　一二二
二木鮒三、画・柴田春光「身替り」（推薦作）　一三七
矢田挿雲「江戸から東京へ」　一五八
柳田国男、小杉未醒、松居松翁、岸辺福雄、鈴木文四郎「名士の声」　一七二
白井喬二「朝日ケ丘より」　一七八
死のさまざま（読者課題）
　クルビンスキー、訳・小酒井不木「彼の死」　一八二
　土師清二「卒堵婆に酒をあびせる」　一九六
　本山荻舟「私が死んだら」　二〇三
　平山蘆江「ある姉と妹」　二〇七
　江戸川乱歩「吸血鬼」　二一一
編集子「大衆文芸往来」　二一六
池内祥三「編集後記」　二二〇
表紙と挿絵

表紙「酉の市」……河野通勢
挿絵……大井九三、伊藤幾久造、河野通勢、太田雅光、平山蘆江、柴田春光

一九二六年九月二五日印刷　一九二六年一一月一日発行
発行兼編集者　川畑玄二（東京市丸の内有楽町二―一報知ビルデング内）
発行所　二十一日会（東京市丸の内報知ビルデング）
発売元　報知新聞社出版部（東京市丸の内有楽町二―一）
印刷所　共同印刷（東京市小石川区久堅町一〇八番地）
印刷者　大橋光吉（東京市小石川区久堅町一〇八番地）
定　価　五〇銭
形　態　A五版、二二〇頁、図版、広告

『大衆文芸』一二月号　第一巻第一二号　一九二六（大正一五）年一二月一日

クラウヂオ・バスト、訳・小酒井不木、画・大沢鉦一郎「他の女」　二
土師清二、画・小田富弥「船饅頭」　一四
直木三十五「去来三代記」発端篇六　二六
正木不如丘「鏡―光り苔―」（四）　三六
長谷川伸「唄香華―逝ける妻へ―」　六三
寺田瑛「時間を盗まうとした話」　六四
本山荻舟「続野菜礼讃＝大衆料理講座＝」其一〇　六七
直木三十五「何をしてゐるのだ」　六九
平山蘆江「屁の話」　七二
阿部淑子、画・河野通勢「男を恋する男」（推薦作）　七四
池内祥三「「男を恋する男」の作者」　九五
二木鮒三、画・伊藤幾久造「朔の散歩（A刑事の打ち開け話）」　九六
平山蘆江「脚本　赤穂不義士」　一一四
あの男「北海道の女」　一三四
中村芝鶴「弗入―夢のお話―」　一三六

平山蘆江「長谷川君と私」　一三九
白井喬二「朝日ケ丘より」　一四二
未署名「新年号予告」　一四四
本山荻舟、画・太田雅光「禁酒」　一四六
安藤静花、画・八幡白帆「あの人たち」（推薦作）　一六九
少年時代の愛読書（同人課題）
土師清二「枕だこ」　一九四
小酒井不木「少年時代の愛読書」　一九七
平山蘆江「由良之助と語る」　一九九
本山荻舟「絵本絵草紙から」　二〇三
池内祥三「雑誌中毒」　二〇六
「大衆文芸往来」　二一五
池内祥三「編集後記」　二二〇
表紙と挿絵
表紙「獅子面」……平山蘆江
挿絵……大沢鉦一郎、小田富弥、河野通勢、八幡白帆、伊藤幾久造、太田雅光

一九二六年一〇月二五日印刷　一九二六年一二月一日発行
発行兼編集者　川畑玄二（東京市丸の内有楽町二―一報知ビルデング内）
発行所　二十一日会（東京市丸の内報知ビルデング）
発売元　報知新聞社出版部（東京市丸の内有楽町二―一）
印刷所　共同印刷（東京市小石川区久堅町一〇八番地）
印刷者　大橋光吉（東京市小石川区久堅町一〇八番地）
定　価　五〇銭
形　態　A五版、二二〇頁、図版、広告

『大衆文芸』新年号　第二巻第一号　一九二七（大正一六（昭和二））年一月一日

平山蘆江、画・自画「唐人船―地の巻―」第一　二
土師清二、画・小田富弥「大笑する政宗」　三八
足立朗々、画・金森観陽「伝三郎武勇伝」　五六
甲賀三郎、画・水島爾保布「黒衣を纏ふ人」　七八
長谷川伸「わしが唄」　一一三
平山蘆江「夢見袋」　一一四
本山荻舟「わが家の雑煮＝大衆料理講座＝」其一一　一一六
（瑞典）エス・ア・ドウーゼ、訳・小酒井不木、画・大沢鉦一郎「毒蛇の秘密」（第一回）　一一八
藤島一虎、画・小林永二郎「敵討地蔵和讃」（推薦作）　一四七
山本柳葉、画・伊藤幾久造「兵衛の仇」　一七六
林不忘、画・河野通勢「武将成敗記」　一九八
最初の収入（同人課題）
長谷川伸「悪字の理由」　二二五
国枝史郎「最初の所得」　二二七
直木三十五「十一円五十銭」　二二八
平山蘆江「賞金と俸給と」　二三二
土師清二「最初の収入」　二三六
本山荻舟「初収入いろ〳〵」　二四二
湊邦三、画・八幡白帆「藤馬は強い」　二四五
葉多黙太郎、画・河野通勢「くゞつの女」（推薦作）　二九四
長谷川伸、画・柴田春光「八百蔵吉五郎」（二幕）　三二二
寺田瑛「スポーツと道楽」　三五七
平山蘆江「喧嘩変遷記」　三五九
本山荻舟、画・太田雅光「日蓮新説法」　三六三
小原俊一郎、画・執筆者不記「陽炎」（一幕）（推薦作）　三八八
横溝正史「山名耕作の不思議な生活」　四一四
「大衆文芸往来」　四三七
池内祥三「編集後記」　四四〇

表紙と挿絵
表紙……平山清郎
挿絵……平山蘆江、小田富弥、金森観陽、水島爾保布、大沢鉦一郎、小林永二郎、伊藤幾久造、河野通勢、柴田春光、八幡白帆、太田雅光

一九二六年一一月二五日印刷　一九二七年一月一日発行
発行兼編集者　川畑玄二（東京市丸の内有楽町二―一報知ビルデング内）
発行所　二十一日会（東京市丸の内報知ビルデング）
発売元　報知新聞社出版部（東京市丸の内有楽町二―一）
印刷所　共同印刷（東京市小石川区久堅町一〇八番地）
印刷者　大橋光吉（東京市小石川区久堅町一〇八番地）
定　価　一円
形　態　A五版、四四〇頁、図版、広告

『大衆文芸』二月号　第二巻第二号　一九二七（大正一六〔昭和二〕）年二月一日

長谷川伸、画・名取春仙「三介の面」　二
（瑞典）エス・ア・ドウーゼ、訳・小酒井不木、画・大沢鉦一郎「毒蛇の秘密」（第二回）　二八
本地正輝、画・清水三重三「妖気」　五六
長谷川伸「わしが唄」　七九
長谷川伸「天狗都々逸」　八〇
土師清二「思ふ事」　八二
本山荻舟「汁いろ〳〵＝大衆料理講座＝」其一二　八三
本山荻舟、画・太田雅光「茶の湯談義―日蓮新説法」その二　八六
野村無名庵、画・金森観陽「手品師受難」（推薦作）　一〇二
山上伊太郎「傀儡師―墓穴はまだ掘れないか―」（推薦作）　一二四
平山蘆江、画・自画「唐人船―地の巻―」第二　一四四
梧桐知秋、画・河野通勢「悉有仏性　しばい」（推薦作）　一七二
平山蘆江「爪の星」　一九三
寺田瑛「あそび」　一九五
平山蘆江「長谷川伸作松竹座上演　世に出ぬ豪傑　井上正夫氏へ」　一九七
本山荻舟「世に出た豪傑」　一九九
俺の空想（読者課題）
土師清二「機関銃」　二〇一
長谷川伸「空想の空想」　二〇五
本山荻舟「空想の関所」　二〇八
平山蘆江「空想年代記」　二一〇
二十一日会同人「慎みて哀悼の意を表し奉る」　二一四
「大衆文芸往来」　二一五
池内祥三「編集後記」　二二二
表紙と挿絵
表紙……平山清郎
挿絵……伊藤幾久造、河野通勢、名取春仙、大沢鉦一郎、清水三重三、太田雅光、平山蘆江、金森観陽

一九二六年一二月二五日印刷　一九二七年二月一日発行
発行兼編集者　川畑玄二（東京市丸の内有楽町二―一報知ビルデング内）
発行所　二十一日会（東京市丸の内報知ビルデング）
発売元　報知新聞社出版部（東京市丸の内有楽町二―一）
印刷所　共同印刷（東京市小石川区久堅町一〇八番地）
印刷者　大橋光吉（東京市小石川区久堅町一〇八番地）
定　価　五〇銭
形　態　A五版、二二二頁、図版、広告

『大衆文芸』三月号　第二巻第三号　一九二七（昭和二）年三月一日

与良松三郎「「西南戦争」と「弱い奴強い奴」」　巻頭
国枝史郎、画・河野通勢「蜜蜂」　二
藤島一虎、画・岡田七蔵「生命の貼札」　二〇
（瑞典）エス・ア・ドウーゼ、訳・小酒井不木、画・大沢鉦一郎「毒蛇の秘密」（第三回）　五四
長谷川伸「わしが唄」　八三
直木三十五「吾が大衆文芸陣（一）　青野相馬両氏に与ふ」　八四
長谷川伸、画・柴田春光「仇討人」（一幕二場）　八八
土師清二、画・岡本一平「備後吉上機嫌」　一一三
山上伊太郎「傀儡師」其二　一三六
長谷川伸「曲馬の子供達」　一五五
示洋三「笑ひきれぬ話」　一五七
国枝史郎「小酒井氏の紅蜘蛛綺譚」　一五八
湊邦三、画・小林三喜雄「満月」　一六〇
本山荻舟、画・太田雅光「龍の口回顧　日蓮新説法」その三　一九四
理想の美人（読者課題）
土師清二「下らない課題」　二一一
直木三十五「阿呆らしい―」　二一四
本山荻舟「落第生の理想」　二一八
「大衆文芸往来」　二二一
池内祥三「編集後記」　二二四
表紙と挿絵
表紙……平山清郎
挿絵……伊藤幾久造、河野通勢、岡田七蔵、柴田春光、岡本一平、太田雅光、大沢鉦一郎、小林三喜雄

一九二七年一月二五日印刷　一九二七年三月一日発行
発行兼編集者　川畑玄二（東京市丸の内有楽町二―一報知ビルデング内）
発行所　二十一日会（東京市丸の内報知ビルデング）
発売元　報知新聞社出版部（東京市丸の内有楽町二―一）
印刷所　共同印刷（東京市小石川区久堅町一〇八番地）
印刷者　大橋光吉（東京市小石川区久堅町一〇八番地）
定　価　五〇銭
形　態　A五版、二二四頁、図版、広告

『大衆文芸』四月号　第二巻第四号　一九二七（昭和二）年四月一日

平山蘆江、画・自画「唐人船―地の巻―」第三　二
直木三十五「吾が大衆文芸陣（二）　橋爪健君に与へて「人生的意義」を冷笑す」　四四
安藤静花、画・伊藤幾久造「褌を縫ふ男の家」　四八
山上伊太郎「傀儡師」其三　七八
土師清二「放火草」　一〇一
直木三十五、画・河野通勢「細聞雲母阪」　一〇六
長谷川伸、画・柴田春光「高館弁慶」　一二四
長谷川伸「拙作「高舘弁慶」未完となつた事情を述べます」　一三一
岳三千古、画・岡田七蔵「大赦」（推薦作）　一三二
「次号（五月号）予告！！！」　一四六
国枝史郎、画・清水三重三「郡上の八幡」　一四八
本山荻舟「通であり過ぎる　『赤穂不義士』と『八百蔵吉』　一八〇
平山蘆江「心意気」　一八二
長谷川伸「わしが唄」　一八三
本山荻舟「飯＝大衆料理講座＝」其一三　一八四
小酒井不木、画・松田種次「探偵小説劇　龍門党異聞」全三幕七場　一八六
最も印象に残つた人（読者課題）
直木三十五「残念印象記」　二三八
土師清二「「箱乗り」その他」　二四四

蕪坂蜷「阿嬌」（入選）　二四七
長谷川伸「どこかの婆さま」　二五〇
小林専一「彼女の眼」（入選）　二五三
大崎章二「頬の刀傷」（入選）　二五四
矢田挿雲「子規との初対面」　二五五
江戸川乱歩「参与官と労働代表」　二五九
「大衆文芸往来」　二六三
池内祥三「編集後記」　二六四

表紙と挿絵

表紙……平山蘆江（注四）
挿絵……河野通勢、伊藤幾久造、松田種次、平山蘆江、岡田七蔵、清水三重三

一九二七年二月二五日印刷　一九二七年四月一日発行
発行兼編集者　川畑玄二（東京市丸の内有楽町二―一報知ビルデング内）
発行所　二十一日会（東京市丸の内報知ビルデング）
発売元　報知新聞社出版部（東京市丸の内有楽町二―一）
印刷所　共同印刷（東京市小石川区久堅町一〇八番地）
印刷者　大橋光吉（東京市小石川区久堅町一〇八番地）
定　価　五〇銭
形　態　A五版、二六四頁、図版、広告

『大衆文芸』五月号　第二巻第五号　一九二七（昭和二）年五月一日

長谷川伸、画・柴田春光「高館弁慶」　四
本山荻舟、画・太田雅光「新聞論議　日蓮新説法」その四　二〇
直木三十五「吾が大衆文芸陣（三）　谷崎精二君に与へて通俗非通俗を説く」　二九
土師清二、画・小田富弥「からす金」（シナリオ風）　三四
命拾ひをした話（同人課題）
小寺古面「殺人鬼入江三郎の凶刃」（入選）　六八
薄井清風「銃弾命中」（入選）　七〇
加藤博「虎の爪に」（入選）　七一
小川昌「隣の男」（入選）　七三
相羽有「空中のアクシダン」（入選）　七五
矢田挿雲「命拾い三つ」　七七
（瑞典）エス・ア・ドーゼ、訳・小酒井不木、画・大沢鉦一郎「毒蛇の秘密」（第四回）　八六
山上伊太郎「傀儡師」其四　一〇一
本山荻舟「汁かけ茶漬＝大衆料理講座＝」其一四　一二六
土師清二「「大赦」と「剣劇」」　一二八
福原雨六「大衆文芸東々逸」　一三〇
湊邦三「二十一日会初出席の記」　一三四
直木三十五、画・河野通勢「細聞雲母阪」　一三六
平山蘆江、画・自画「唐人船―地の巻―」第四　一五四
直木三十五「剣法雑俎」　一七一
平山蘆江「春さめ」　一八二
長谷川伸「わしが唄」　一八三
正木不如丘「飯縄原」　一八四
江戸川乱歩選「募集小咄」　二〇二
矢田挿雲選「春季雑題」　二〇四
長谷川伸選「都々逸」（十一首）　二〇五
俎上の人　本山荻舟（「人」及びその「作品」）
本山荻舟「新聞論議　日蓮新説法」その四（原稿影印）　二〇六
渡辺寿三郎「旧師の見たる本山仲造」　二〇七
能仁事一「本山君の日蓮研究」　二〇八
多田紅太郎「二十年前の荻さん」　二一一
田村西男「私のテキさん」　二一三

国枝史郎「荻舟氏初見参印象」　二一五
花の茶屋主人「なか〳〵の食通」　二一八
菊池寛「気品ある作風」　二一九
土師清二「本山さんの著作」　二二〇
長谷川伸「劇評に現れたる特異点」　二二一
池田林儀「新聞記者として」　二二二
池内祥三「その挿話」　二二四
船井梅南「写真鑑定」　二二七
「大衆文芸往来」　二三〇
「新刊紹介」　二三三
池内祥三「編集後記」　二三四
表紙と挿絵
表紙……平山清郎
挿絵……柴田春光、太田雅光、大沢鉦一郎、伊藤幾久造、小田富弥、河野通勢、平山蘆江

一九二七年三月二五日印刷　一九二七年五月一日発行
発行兼編集者　川畑玄二（東京市丸の内有楽町二―一報知ビルデング内）
発行所　二十一日会（東京市丸の内報知ビルデング）
発売元　報知新聞社出版部（東京市丸の内有楽町二―一）
印刷所　共同印刷（東京市小石川区久堅町一〇八番地）
印刷者　大橋光吉（東京市小石川区久堅町一〇八番地）
定　価　五〇銭
形　態　A五版、二三四頁、図版、広告

『大衆文芸』六月号　第二巻第六号　一九二七（昭和二）年六月一日

長谷川伸、画・水島爾保布「柄杓酒」（一幕）　六
潮山長三、画・木村荘八「幽明鏡草紙」　二〇
長谷川伸「わしが唄」　四七
木村哲二、画・金森観陽「春宮冊子畸聞」（推薦作）　四八
女だつたら、男だつたら（同人課題）
青柳春海「暴行者死刑」（入選）　六六
小山栄二「江戸の名残にも」（入選）　六八
三良しかを「日本髷、日本髷」（入選）　七一
衣笠雅逸「玩具をなぶる女」（入選）　七二
金沢十九「理髪師に」（入選）　七四
堀部美津子「私が男であつたら」（入選）　七七
山上伊太郎「傀儡師」其五　七九
（瑞典）エス・ア・ドウーゼ、訳・小酒井不木、画・大沢鉦一郎「毒蛇の秘密」（第五回）　九八
土師清二「きつね」　一一四
長谷川伸「大銭小銭」　一二八
平山蘆江「四月録」　一三〇
本山荻舟「魚じまの話＝大衆料理講座＝」其一五　一三三
平山蘆江「雲の峯」（注五）　一三六
平山蘆江選「眠気と雨」（都々逸）　一三七
国枝史郎選「短歌雑詠」　一三八
本山二牛選「当季（春、夏）雑題」　一三九
白井喬二選「川柳「赤」」　一四〇
平山蘆江、画・自画「唐人船―地の巻―」第五　一四二
本山荻舟、画・太田雅光「凡夫　日蓮新説法」その五　一六四
漫々亭「茶話夜話（一）―手控へから活字へ―」　一七六
殺人奇譚
小酒井不木「笑話と殺人」　一七八
二木鮒三「公傷患者の憤怒」　一八一
平山蘆江「修羅場実説」　一八四

正木不如丘「医者の失敗」　一八七
本山荻舟「斬るか突くか」　一八九
市村菊吉「耳朶袋―あらしやば手記―」　一九三
俎上の人　江戸川乱歩（「人」及び「作品」について）
森下雨村「江戸川君と私」　一九七
小酒井不木「江戸川氏と私」　一九九
甲賀三郎「キビ〳〵した青年紳士」　二〇一
春日野緑「乱歩君の印象」　二〇三
星野辰男「気分屋」　二〇五
川崎やす子「純な太郎さん」　二〇七
本位田準一「江戸川乱歩の旧悪」　二一〇
江戸川乱歩「僕の職業変遷史」　二一三
池内祥三「ある日の乱歩氏」　二一五
福田耕一「筆蹟鑑定」　二一七
「大衆文芸往来」　二一九
池内祥三「編集後記」　二二二
表紙と挿絵
表紙……平山清郎
挿絵……河野通勢、伊藤幾久造、水島爾保布、木村荘八、金森観陽、大沢鉦一郎、太田雅光、平山蘆江

一九二七年四月二五日印刷　一九二七年六月一日発行
発行兼編集者　川畑玄二（東京市丸の内有楽町二―一報知ビルデング内）
発行所　二十一日会（東京市丸の内報知ビルデング）
発売元　報知新聞社出版部（東京市丸の内有楽町二―一）
印刷所　共同印刷（東京市小石川区久堅町一〇八番地）
印刷者　大橋光吉（東京市小石川区久堅町一〇八番地）
定　価　五〇銭
形　態　A五版、二二二頁、図版、広告

『大衆文芸』七月号　第二巻第七号　一九二七（昭和二）年七月一日

正木不如丘、画・湊悦二「快刀乱麻（上）―光り苔」（五）　六
松野乙喜久「野太鼓調子＝新古貼り交ぜ＝」　二七
湊邦三、画・小林三喜雄「嗤つて千両」（上篇）　二八
残念物語（課題）
寺田幸吉「残念以上」　五〇
太田棟星「泥棒と巡査と金」　五三
高橋三男「やぶつて捨た三千円」　五五
岡田耕平、画・金森観陽「悪鬼になつたピリト」（推薦作）　六〇
長谷川伸、画・伊藤幾久造「彼我二通」　九二
旅の思ひ出（随筆）
長谷川伸「三つの旅」　一〇五
安藤盛「蕃界の孤児」　一〇六
木村哲二「署長室の芸者」　一〇八
国枝史郎「定住居を厭ふ心」　一一〇
二木鮒三「赤城山行」　一一二
梧桐知秋「パスの旅」　一一三
土師清二「茶代五十銭」　一一五
本地正輝「傷心断腸の旅」　一一八
藤島一虎「新潟美人とおけさ節」　一二〇
岳三千古「隣室の泣き声」　一二一
小酒井不木「アルカシヨンの思ひ出」　一二三
山本柳葉「佐渡を訪へる時」　一二六
林不忘「年寄ぶつてみる」　一二七
正木不如丘「二股大根」　一二九
阿部淑子「熱海への旅」　一三一

潮山長三「新潟美人一寸拝見」　一三三
足立朗々「旅の思ひ出」　一三五
甲賀三郎「ハイデルベルヒ」　一三七
湊邦三「病める援兵」　一三九
「馴染のない地名」　一四一
本山荻舟「精進物礼讃＝大衆料理講座＝」其一六　一四二
漫々亭「茶話夜話（二）―手控へから活字へ―」　一四四
純生（名古屋）「山本鉄眉に就いて」　一四六
土師清二「飲む前の話」　一四六
平山蘆江「五月録」　一四九
「九世柄井川柳の句」「蠅の目の効能」　一五〇
二十一日会同人「「柄杓酒」上演に際して」　一五一
（瑞典）エス・ア・ドウーゼ、訳・小酒井不木、画・大沢鉦一郎「毒蛇の秘密」（第六回）　一五二
直木三十五「吾が大衆文芸陣（四）　宇野浩二に与へて文芸の分野を説く」　一七〇
「帝劇の「龍門党異聞」劇」　一七〇
本山荻舟「龍門党劇断片」　一七〇
木村哲二「偉大なる哉大衆劇」　一七二
湊邦三「面白かつた」　一七三
長谷川伸「戯曲への進出」　一七四
池内祥三「仲間部屋の訴へ」　一七五
「新刊紹介」　一七六
直木三十五選「川柳課題「髭」」　一七九
本山荻舟、画・太田雅光「禁欲生活是非―日蓮新説法」その六　一八〇
平山蘆江、画・自画「唐人船―地の巻―」第六　一九〇
平山蘆江「蚊帳の月」　二〇四
長谷川伸「わしが唄」　二〇五
小酒井不木選「募集小咄」　二〇六
長谷川伸選「「顔」と「夕焼」と」（新都々逸）　二〇七
湊悦二「平山蘆江氏」　二〇八
俎上の人　平山蘆江（人及び作品について）　二〇九
南木芳太郎「「唐人船」で追憶する平山君」　二〇九
岡田源吉「旅館の御亭主」　二一二
石割松太郎「二十年前の初対面」　二一四
松崎天民「新聞記者としての蘆江」　二一七
前島道博「芸界の功績」　二二〇
坂東のしほ「理性と熱情と」　二二二
土師清二「良き先輩」　二二三
国枝史郎「平山蘆江氏印象記」　二二四
長谷川伸「長兵衛と銭」　二二七
須田栄「艶福家」　二三〇
至玄社主人「出版屋から見た蘆江先生」　二三三
中村芝鶴「平山のオトウサン」　二三五
三宅孤軒「親切な人」　二三八
池内祥三「平山さんの家庭」　二四一
「大衆文芸往来」　二四二
池内祥三「編集後記」　二四四
表紙と挿絵
表紙……平山清郎
挿絵……湊悦二、小林三喜雄、金森観陽、伊藤幾久造、大沢鉦一郎、平山蘆江、太田雅光、河野通勢

一九二七年五月二五日印刷　一九二七年七月一日発行
発行兼編集者　川畑玄二（東京市丸の内有楽町二―一報知ビルデング内）
発行所　二十一日会（東京市丸の内報知ビルデング）

発売元　報知新聞社出版部（東京市丸の内有楽町二―一）
印刷所　共同印刷（東京市小石川区久堅町一〇八番地）
印刷者　大橋光吉（東京市小石川区久堅町一〇八番地）
定　価　五〇銭
形　態　A五版、二四四頁、図版、広告

【解説】

一　はじめに

本稿は雑誌『大衆文芸』（第一次）の総目次である。『大衆文芸』は一九二六年一月から一九二七年七月まで、合計一九冊発行された二十一日会発行の機関誌である。二十一日会の同人は、江戸川乱歩、国枝史郎、小酒井不木、白井喬二、直木三十五、土師清二、長谷川伸、平山蘆江、正木不如丘、本山荻舟、矢田挿雲の十一名の小説家たちと、雑誌の編集にあたった池内祥三であった。

当該雑誌に関する総目次はこれまでの研究の中でも作られてきた。先鞭をつけたのは、尾崎秀樹（注六）である。尾崎秀樹の目録では小説はすべて紹介されていて、小説ごとに挿絵画家の名前が記されている。その一方で、随筆の記載については簡略化されている。たとえば、第二号は「探偵小説は大衆文芸か（乱歩）ほか六本の随筆」、第三号は「随筆七本」、第五号から加わる同人課題は「新しい企画として同人課題による随想が加わった。第一回の課題「女酒花」」などと記されるのみである。次は、荒井英生「大衆文芸」（注七）である。この総目次は第一次『大衆文芸』から第三次『大衆文芸』の第七巻第六号（一九四五年一二月）までを網羅している点で優れている。しかし、連載作品については、初回の連載時にいつまで連載が継続されたかが示されて、二回目以降は記載されない。そのため、いちいち初回の開始時点に戻り、いつまで連載されたかを確認しなければならず使いにくい。近年では、早稲田大学図書館編『マイクロフィッシュ版早稲田大学図書館編精選近代文芸雑誌集　「大衆文芸」総目次』（注八）が発表された。小説、随筆、同人課題などを詳細に記し、かつ各巻号ごとに書誌情報も記されており、これまでの総目次に比べると使いやすい。その一方で、目次による作成を行っているため、挿絵については画家名を一まとめにして記していて、どの画家がどの作品の挿絵を担当したのかが分からない。また、目次から漏れている埋め記事についての記載がない。

本稿では、小説（と挿絵画家）、図筆、同人課題、埋め記事などを、作品の掲載順に並べ、著者名、翻訳者名、画家名、作品名、ページ数など、書ける情報はすべて開示するように、内題の表記を優先的に表記するよう心がけた。そうすることによって、従来の研究では確認できなかった事柄についても、一目でわかるように表示した。

本稿では、まず、二十一日会の活動とはどのようなものだったのかを整理するところからはじめたい。また、『大衆文芸』の活動の実態はどのようなものだったのかを明らかにしていく。そして、『大衆文芸』に対する当時の反応はどのようなものだったのかについて考察していきたい。

二　『大衆文芸』誕生前の二十一日会の活動

まず、この節では二十一日会の活動の状況を確認するところからはじめたい。この会の活動の全貌が明らかになっている訳ではない。それでも江戸川乱歩の証言や、『大衆文芸』の各巻の末尾に掲載された池内祥三「編集後記」を中心に、ある程度、活動内容を把握することが可能である。では、どのような活動が行われていたのか、その内容を確認していこう。

活動は「白井喬二年譜」（注九）によれば、一九二五年の「秋、大衆作家の親睦機関「二十一日会」を直木三十五らと創設」したとある。ただし、この年の夏から始まったとする説もある（注一〇）。もう少し詳細に記されている資料を参照しよう。真鍋元之編集による事典（注一一）には、『大衆文芸』のことが次のように記されている。

この雑誌こそは、われわれの文学史にとっての天の岩戸開きであったと言っても言い過ぎではないのだが、そういう雑誌の発刊を動議した七名の同人ちゅう、五名までが報知、都両紙の関係者であったことを思えば、この文学運動の発源地を、両紙の編集部に求めることも、あながち牽強付会ではあるまいと思う。編集事務担当の池内祥三（明治二九～滋賀県生）を、『人情倶楽部』（武侠社発行）編集部から引き抜いてきたのも、都新聞に籍をもつ平山蘆江であった。

当時、本山荻舟、矢田挿雲が報知新聞編集部員、長谷川伸、平山蘆江が都新聞編集部員で、白井喬二が『報知新聞』に「富士に立つ影」を連載中だったことはよく知られている。報知新聞社、都新聞社の関係者に加え、直木三十三（後の直木三十五）、正木不如丘、江戸川乱歩、国枝史郎、小酒井不木、土師清二を加えて一一名の同人となった。たとえば、伊東昌輝「長谷川伸年譜」（注一二）の「大正十四年（一九二五）四十一歳」にも、

九月二十一日、数寄屋橋脇の花の茶屋にて、同人、白井喬二、本山荻舟、平山蘆江、池内祥三、小酒井不木、土師清二、国枝史郎、直木三十三らと二十一日会を結成。報知新聞出版部の後援にて雑誌『大衆文芸』（第一次）の発刊を決める。（後に江戸川乱歩、矢田挿雲、正木不如丘らも同人として参加する）

とある。最初に集まったメンバー、その後に追加されたメンバーの名前が明らかにされている。一九二五年九月二五日付、小酒井不木書簡江戸川乱歩宛（注一三）には、「突然ですが、こんど東京で大衆作家同盟が出来、大兄にはひつて頂きたいと、発起人の池内氏が申して来て、私にも意向をたづねてくれと申してきました」とある。この書簡は伊東昌輝「長谷川伸年譜」（前掲）を裏付けるものといえよう。

二十一日会の活動は、当時の新聞でも報道されている。未署名「『大衆文芸』の創刊」（注一四）は、「この同人の連盟を『廿一日会』とし、毎月花の茶屋で会合大いに気勢をあげる」とある。また、未署名「よみうり抄」（注一五）には、「二十一日会　江戸川乱歩氏の上京を機として長谷川伸、白井喬二、本山荻舟、平山蘆江、正木不如丘、矢田挿雲氏等で今夕五時花の茶屋に開催」ということが記されている。さらに、未署名「よみうり抄」（注一六）には、「廿一日会例会　「大衆文芸」同人で今夕花の茶屋に催す大阪から土師清二氏奈良から直木三十三氏出席の筈」とある。このように、二十一日会の活動は一九二五年の秋頃に始まったと見ていいだろう。

江戸川乱歩（注一七）が、一九二五年一二月六日、「夕方から「花の茶屋」の「大衆文芸」の会へ行く。池内氏が誘いに来て下さる。白井喬二、本山荻舟、長谷川伸、平山蘆江、正木不如丘、久保田朝興（ともおき）の諸氏が集まる。編集上の打合せそのほか色々話す」と記している。大衆文学の親睦を目的として集まった人々は、この頃には雑誌『大衆文芸』を世に問おうとしており、そのための活動を行っていたのである。

『大衆文芸』創刊号の奥付には、一九二六年一月一日発行であることが記されている。しかし、実際には一九二五年一二月には発行されていたようである。たとえば、青木武雄（注一八）によれば、「計画は十四年秋に始まり、誌名を『大衆文芸』と登録して、創刊号は十五年一月一日付であつたが、配本は年内にして、いはゆる本格的大衆文芸道を樹立した」という。

それは当時の『大衆文芸』のメディア戦略、とりわけ新聞広告の打ち方でも確認することができる。たとえば、最も早い『大衆文芸』の広告は、一九二五年一一月二六日、『読売新聞』朝刊だろう。雑誌の発行元である『報知新聞』は、一九二五年一二月一日夕刊、同一二月一四日朝刊に広告を打ち、作家名と掲載小説名とを掲げていた。『東京朝日新聞』も、一九二五年一二月二日の朝刊に掲載されている。同年一二月一五日にも『大衆文芸』の広告が『東京朝日新聞』の朝刊に掲載されている。このように、作家名・作品名を付した新聞公告が打たれたのである。このことは、奥付の日付よりも前に雑誌が発刊されていた可能性が高いことを意味する。一九二五年一二月に刊行を実現した二十一日会の同人たち

は、これ以降、どのような活動を行ったのだろうか。

三　『大衆文芸』創刊後の二十一日会の活動

一九二六年以降の二十一日会の活動については、池内祥三が『大衆文芸』の「編集後記」にその一端を紹介するようになる。池内祥三（注一九）によれば、

二十一日会は毎月二十一日に花の茶屋へ同人が参集して、大衆文芸の編集、経営に関して忌憚なき意見の交換」をやるということを語っている。そして、同人の出席状況について、「昨年の九月初回以来の皆出席者が平山氏、正木氏。名古屋連の小酒井、国枝両氏は旅行困難で今日まで出席なく、大阪よりは土師氏が昨年末に一回出席。直木氏奈良から上京の熱心ぶり。昨今ちよい〳〵欠席するのが（原稿でもちよい〳〵休むが）白井、江戸川両氏。

という。その後、「七月の例会（二十一日）には大阪から土師氏が上京せられた。直木氏も奈良から上京、正木、本山、平山、長谷川の四氏に出版部の川畑氏と小生の八人にて早速拾月号の特別題号について相談。（中略）結局、『現代奇人号』とする事になつた」（注二〇）ということや、「此の二十一日会は多摩河原の玉華楼で開ひた。土師氏、直木氏は前日電報にて出席不可能の旨謝つて来る。本山氏は旅行中で欠席。長谷川、平山氏と、小生と川畑氏の四人であつた」（注二一）といったことが記されている。

東京を離れて名古屋で例会を開催することもあった。池内祥三（注二二）は、「二十一日会は此の十一月の例会を名古屋の八勝館で開催いたしました。非常な盛会で夜は名古屋新聞社の招待を受けました」とある。ここには人名は示されていないが、名古屋在住の国枝史郎と小酒井不木が参加したのである。

これ以外で特徴的なのは、長谷川伸の戯曲の観劇会が行われたこともあったことである。池内祥三（注二三）は、「邦楽座で二月三日から五月信子、高橋義信等の近代座が、長谷川伸氏の「八百蔵吉五郎」（新年号掲載）を上演する」ことを紹介している。この観劇会で同人たちが集まったのはいうまでもないだろう。

さらに、推薦作として『大衆文芸』に登場した湊邦三による例会参加も注目すべきことだろう。湊邦三（注二四）は、

長谷川伸氏と池内祥三とには面識があった。平山蘆江氏と直木三十五氏と、その夜はじめて例会へ出席された甲賀三郎氏とには初対面だった。僕だけの癖かと思ふのだが、名前を見ると名前から、作品を読むと作品から、何時の間にやらその人の風貌を、勝手に想像でデッチ上げる癖がある。だから会つた時、自分の想像した風貌と実物（失礼）とが非常に相違してゐると、すつかり面喰つて終ふことがある。（中略）雑誌経営上の問題や次号の打合せ、どうする、どうしやうの相談が終りを告げてからは、作品で見る味が、そのまゝ座談にも出る長谷川伸氏を中心にして、いろんな話が続出した。

と語っている。新人作家の作品が推薦されて『大衆文芸』に掲載され、同人として迎えられて二十一日会の会合に参加すること。湊邦三の経験を読んだ多くの投稿者たちは、うらやましさを感じただろうし、いつかは自分も二十一日会の活動に名を連ねることが出来るかもしれないと思わせただろう。

これ以降も活動の一端が編集後記にて紹介されている。「本月の例会には、久々にて白井喬二氏出席。常連の平山、本山、長谷川氏に、おくれ走せに直木氏がめづらしや洋服姿にて現れた。無帽主義の直木氏も洋服を着れば帽子を冠らないワケには行かぬと見える」（注二五）ということや、「本月の二十一日会は名古屋で催す予定だつたが同人の内で病気だつたり、事故のため不参者が生じたので、止むなく、五月に延期した。五月の例会には久しぶりで、国枝氏、小酒井氏、土師氏なぞと歓談ができるのを楽みにしてゐる。」（注二六）ということが、池内祥三によって示されているのだ。

こうした活動の中で、注目したいのは『報知新聞』の広告の打ち方である。『報知新聞』紙上ではじめて『大衆文芸』創刊号の広告がうたれたのは、先述したように一九二五年一二月一日のことであった。その後、月一回、『大衆文芸』の広

告が『報知新聞』に掲載されることになる。注目すべきは当番で同人たちが雑誌をアピールした文章を広告に載せ始めたことである。最初の当番は、一九二六年八月九日に掲載された本山荻舟で、雑誌を同人たちの「住居」に見立て、「『大衆文芸』とは、同人の経営している雑誌の名前」であり、「住つてゐる人は各人各様で、おの〳〵特色がある」と記している。次は、一九二六年九月一二日に掲載された江戸川乱歩で、「『大衆文芸』の作家達は恐らく清新なるロマンチストの一群」であるとし、「煩はしくも物憂き人世の、オアシスである」とする。その後は、一九二六年一一月二一日が本山荻舟、一九二六年一二月七日が長谷川伸、一九二七年三月一二日が小酒井不木といったように、何名かの同人が持ち回りで広告文を当番で担当していたのである。

このように、毎月二一日を軸に、東京・花の茶屋（他の場所や名古屋での会もあった）に同人たちが集まり、親睦を深めるだけでなく、『大衆文芸』の編集、広告宣伝、経営、企画、観劇など、様々なことが話し合われ、それが雑誌の編集に反映されていったのである。

四　『大衆文芸』の活動

『大衆文芸』は、創刊号から第二巻第七号まで、一九冊刊行された。創刊号から第一巻第三号までの発行兼編集者は久保田朝興であった。第一巻第四号から第一巻第八号までは広瀬憙六（きろく）、第一巻第九号以降は川畑玄二が担当した。印刷所は創刊号から第一巻第八号までは日東印刷株式会社、第一巻第九号以降は共同印刷が印刷した。

掲載された小説の多くは時代小説で、探偵小説がそれに続いた。とくに評価されているのは、長崎を舞台に浦川幸太郎少年の成長を描いた平山蘆江「唐人船」（一九二六年一月～一〇月、一九二七年一月～七月）、東京の小石川界隈の歴史を描いた矢田挿雲「江戸から東京え」（一九二六年一月～一一月）、お岩と伊右衛門の関係を描いた国枝史郎「穏亡堀」（一九二六年六月）や、横浜を舞台に日本人巾着切りと西洋の巾着切りの戦いを描いた長谷川伸「舶来巾着切」（一九二六年九月）などだった。

創刊号の発行部数は二六〇〇〇部であった。第六号の「編集後記」に示された発行部数三七〇〇〇部となっている。これが、確認できる限りにおいて、最も大きい発行部数となっている。尾崎秀樹（注二七）によれば、「終刊時の部数は約一五〇〇〇ほどだ」という。その後、少しずつ減少していったものと思われる。いずれにせよ多くの大衆文学関係の雑誌が発行部数一〇万部を超えていたことを考えると、お世辞にも発行部数が多いとは言い難い。

発行部数が一旦は増加したもののその後減少に転じたのは、同人の小説執筆が少なかったことも一つの要因といえるだろう。売れっ子になり、他誌・他紙からの原稿依頼が多くなったことがその原因である。

それ以上に同人たちのモチベーションが上がらなかったのは、原稿料なしで執筆を続けていたからではなかったか。たとえば、二十一日会同人「〈広告〉大衆文芸」（注二八）は、「同人が利益を眼中におかず、只働きを覚悟してかゝつた仕事だ」と記されている。報知新聞社調査部編『大正16年　報知年鑑』（注二九）でも、「同誌は、大衆芸術の研究、批判及び普及を標ぼうし、同人は一文の原稿料も受けず、全く芸術的な欲求から書いている」とある。こうした方針は同人たちに不満を抱かせるに充分であっただろう。小酒井不木書簡江戸川乱歩宛（一九二六年一〇月四日）（注三〇）も、「本当にタヾ奉行（ママ）では力もはひらず、かうなるのも無理はないと思ひます」とある。このように、万を越える発行部数があったにもかかわらず、同人たちは原稿料なしで執筆していたのである。

それでも各巻末の「大衆文芸往来」には、同人の小説をもっと載せてほしいという投稿が相次いだ。小説の執筆については、同人の間でも開きがある。エッセイ「江戸から東京え」を発表していた矢田挿雲が小説を書いていないのは特別として、一九冊刊行された内、江戸川乱歩が三回、白井喬二が四回と少ない。一方、毎号のように小説を書き続けたのは、本山荻舟が一七回、平山蘆江が一五回、土師清二が一四回、長谷川伸が一三回などである。なお、長谷川は小説以外にも戯曲を四回発表している。すでに売れっ子となり他誌からも声がかかるか否かが発表回数と関わっているのだろうが、乱歩や白井の回数の少なさが目立つ。小説数

の減少を新人の推薦作で埋めようとし、湊邦三、二木鮒三、山上伊太郎、阿部淑子などの作品が発表されて雑誌の継続がはかられたのである。

刊行の継続については、苦心の跡が誌面から見て取れる。最終巻となった一九二七年七月号には、「次号」があることを示唆する文言を随所に見て取ることができるのである。たとえば、巻頭の正木不如丘「快刀乱麻（上）―光り苔（五）―」の末尾には、「休載」のお詫びと「今月から又連載します」とある。湊邦三「嗤つて千両」（上篇）の末尾にも「（次号へつゞく）」とある。「課題　残念物語」の最後の頁には「次回の課題」が『怪、奇、異、妖、変』とする旨が記されている。それ以外にも、「次回組上の人　国枝史郎」や、「編集後記」にも「次号」掲載作品のことが記されるなど、「次号」のことが随所に示されているのである。それらから伺えるのは、当該号が作られていたときには、廃刊はまだ決定事項ではなかったか廃刊が決定事項であったことを知られないように次号のことをあえて表記したかであろう。『大衆文芸』の廃刊については、江戸川乱歩（注三一）が、

「大衆文芸」廃刊の理由は収支つぐなわないためであった。私達の「探偵趣味」なども同様であったが、由来同人雑誌は赤字ときまったものである。殊に「大衆文芸」の方は原稿料を一文も払わないで赤字というのだから、お話にならないわけだが、しかしこの雑誌は大衆文芸の宣伝には役立った。充分使命は果したのである。（中略）同人達のあいだにも、一応の目的を達したのだから、この辺で打切りたいという気分が動いていたのも、廃刊の一つの理由であったと思う。

と指摘している。赤字であること、無報酬だったこと、大衆文芸の使命を果たしたことなどを理由に挙げている。

このように、『大衆文芸』は廃刊を迎えたのである。ここまで同人の活動を見てきたが、この間、読者は『大衆文芸』にどのような反応を示してきたのだろうか。次節では、文壇の人々の反応、『大衆文芸』の読者たちの反応、そして他のメディアへと翻案した反応に注目してみたい。

五　同時代の反応

『大衆文芸』の読者たちが投稿した「大衆文芸往来」の内容、評論家や小説家による『大衆文芸』批評、演劇化による他メディアへの展開といった観点から、当該雑誌への反応に注目してみたい。

まず、創刊号の「大衆文芸往来」では、森下雨村、伊藤銀月など一〇名の人物たちの近況が報告され、以後の巻号に引き継がれていく。第一巻第二号から、読者投稿が四本、同人たちの新刊紹介（注三二）が付された。読者からの投稿では、大仏次郎が「「大衆文芸」早速一本を買ひ求めて拝見しました組の綺麗で贅沢な点に驚きました。五十銭では実際安いものだ」と反応しているのが注目される。大仏次郎が文章を寄せているというだけでなく、雑誌の質の高さと値段の安さを評価しているのである。

第一巻第三号では、大衆文学作家の近況の他、『キング』『苦楽』など他の雑誌との比較、掲載作品への批評、挿絵画家の登用に関する要望などが示されている。当該号で注目したい点は二つある。ひとつは、松葉屋悉皆店が「創刊号の紙質」は良かったが、なぜ「二月号の紙質をわるくした」のか、と問うたことである。たしかに、創刊号と第一巻第二号以降とを比較すると、創刊号の紙質の良さが見て取れよう。このことは前述した大佛次郎の「組の綺麗で贅沢」という評価に通じるものがあるだろう。全一九冊確認してみると、創刊号だけが良質紙が使われており、紙質の良さが際立っている。

もうひとつは、遠方林三郎が「大衆文芸改革運動宣言」という論文を書くよう求めたことである。大衆文学理論の構築が求められたのである。しかし、白井喬二が「現在の『大衆文芸』」（『東京日日新聞』　一九二六年一月二八日）において、「私自身としては大衆文芸といふものを十年計画で順次に歩を進めて行き度いと思ふのです。つまり「十年批評をする勿れ」と云ひ度いのです」と記したように、大衆文学運動をけん引した白井喬二自身が他の雑誌・新聞では大衆文学論を展開したにも関わらず、『大衆文芸』誌上で評論を執筆しなかった。それゆえ、遠方

林三郎のような意見が出てきたのである。

第一巻第四号以降、前号の読者投稿に対する反応が見られるようになる。前号の読者の見解に対してときに共感し、ときに反論し、場が盛り上がっていく様相を見てとることができる。また、第一巻第五号では上海から田島武雄が「大衆文芸の発展を遠き空から祈る」という文書を寄せている。この内容からは田島が『大衆文芸』を手に取って読んでいたかつまびらかではない。第一巻第六号の台南の静波真砂、北満の愛読者粋柳生の投稿から『大衆文芸』を手にしていることが伺える。このように、『大衆文芸』は外地にも販路が開かれていたことが確認できるのである。

では評論家や小説家など文壇の反応はどのようなものだったのだろうか。たとえば、菊池寛（注三三）は、雑誌『大衆文芸』にすばやく反応した批評であった。掲載作品一つひとつに批評を加え、本山荻舟「妖女人面人心」を「巻中の白眉」とし、「妖女に人心人情を持たせたのはうれしい」と評価した。菊池寛は一貫して『大衆文芸』に対する賛同を表明している。中でも注目されるのは、一九二六年七月、『中央公論』の大衆文芸研究の特集での菊池寛の発言である。毎号『大衆文芸』を愛読していることを表明した菊池寛（注三四）は、「沈滞し切つてゐる今の文壇をある意味で脅威し得るもだとさへ思つてゐる」とした上で、「大衆文芸は、かびの生えた講談から来る退屈と私小説流行の文壇から来る倦怠を救つてくれる点に於て、智識的読者階級からも充分歓迎されていゝものだ」と指摘した。純文学でも講談でもない新たな文学として、大衆文学を評価したのである。その他、同特集では、村松梢風（注三五）が、創刊号の感想を述べ、本山荻舟「妖女人面人心」、矢田挿雲「江戸から東京へ」、平山蘆江「唐人船」などを高く評価した。

こうした高評価の一方で、懐疑的な意見や批判的な意見がなかったわけではない。たとえば、齋藤龍太郎〈注三六〉は、「大衆文芸は本年の文壇に、一地歩を占めたが、しかし、これからどう発展して行くかは今のところ未知数である」と指摘した。楠田敏郎（注三七）は、「今日の大衆文学の赴く方向を示してゐるものは、何と云つても廿一日会同人の「大衆文芸」だらう」が、「何うも腑に落ちかねるところが多い気がしてゐる」のは、「その全部がと云つてよいくらゐにまで、「芸術品」にならうとしてゐることだ」と指摘した。純文学に近付こうとしていることに警告を発したものであろう。

より鋭く大衆文学について批判をしたのは長谷川如是閑であった。長谷川如是閑（注三八）の文書は翌月の八月の『中央公論』に掲載され、今日の芸術は「模倣的創造、模倣的享楽を繰返してゐる」だけで、「封建的ロマン主義」であり、「過去の時代の生活の幻像を発見するのみ」であるとの指摘を行った。大衆文学に賛同するにせよ批判するにせよ、多くの反応が見られたのである。それだけ、『大衆文芸』に集まった二十一日会の活動が無視できなくなっていたのである。

最後に演劇化による他メディアへの展開についても見ておこう。『大衆文芸』の活動の中で、とりわけ演劇との連携をはかったのが、小説や戯曲を発表していた長谷川伸であった。『大衆文芸』に掲載された作品の中で演劇化された長谷川伸の作品は、以下の六作品である。

・長谷川伸「旅の者心中」（『大衆文芸』一九二六年四月）は、一九三〇年一月、研究劇団が新宿歌舞伎座にて上演（注三九）。
・長谷川伸「世に出ぬ豪傑」（『大衆文芸』一九二六年六月は、一九二六年一二月、井上正夫が浅草松竹座にて上演。
・長谷川伸「蝙蝠安」（『大衆文芸』一九二六年八月）は、一九三〇年一〇月、研究劇団が新宿歌舞伎座にて上演。
・長谷川伸「八百蔵吉」（『大衆文芸』一九二七年一月）は、一九二七年二月、五月信子、高橋義信が邦楽座にて上演。
・長谷川伸「仇討人」（『大衆文芸』一九二七年三月）は、一九二七年九月、市川小太夫、中村翫右衛門が浅草松竹座にて上演。
・長谷川伸「柄杓酒」（『大衆文芸』一九二六年六月）は、一九二七年九月、市村亀蔵、大谷友右衛門が本郷座にて上演。

長谷川伸の作品が小説として雑誌で読者に読まれ、演劇として舞台で観客に見られたのである。このことは長谷川伸の作品が小説読者だけでなく、演劇関係者

たちにも注目されていたことを意味する。幅広い層の人たちに受容されることで、多くの読者・観客を獲得したのである。

六　終わりに

ここまで、雑誌『大衆文芸』（第一次）について検討してきた。まず、総目次を作成し、全情報を一目でわかるように工夫した。これまでの総目次ではなされてこなかったことなので、煩雑になったかもしれない。しかし、全情報が見える総目次があっても良いだろう。次に、『大衆文芸』創刊前の二十一日会の活動の実態を検討した。一九二五年秋頃から親睦の会が始まったこと、活動場所、同人が一一名となるまでのプロセスや編集者が池内祥三に決まったこと、各メディアへの情報発信、雑誌の刊行などを検討した。一連の活動を通して、二十一日会の同人たちが入念な準備をしてきたことが窺えるだろう。

『大衆文芸』創刊後の二十一日会の活動についても考察を加えた。活動の多くは東京の花の茶屋で行われたが時には名古屋で開催されたこともあったこと、『大衆文芸』の編集、広告宣伝、経営、企画、観劇など、様々なことが話し合われ、それが雑誌の編集に反映されていったことを明らかにした。とりわけ、『報知新聞』に同人たちが当番で広告文書を執筆していたことは注目に値しよう。次に注目したのは、『大衆文芸』の活動についても考察を加えた。編集者や発行部数の変遷、原稿料なしによる執筆などに注目し、終刊に至るまでのプロセスを検討した。

最後に、『大衆文芸』の読者たちが投稿した「大衆文芸往来」の内容、評論家や小説家による『大衆文芸』批評、演劇化による他メディアへの展開といった観点から、当該雑誌への反応を考察した。日本国内からだけでなく、外地からも投稿が寄せられたことに注目できるだろう。また、一般の読者たちだけでなく、文壇からも批評が寄せられ、大衆文学がもはや無視しえないほどに注目され始めていたことが窺えるし、長谷川伸の戯曲が演劇化され、視聴者にも享受されたことを明らかにした。

本稿では、作品と挿絵の関係や、作品の映画化の過程を、同時代言説の中で位置づけていこうとすることができなかった。その点が課題として残ったが、引き続き調査を継続していきたい。

【注】

（注一）表紙に「高級娯楽雑誌」と記載されている。第一巻第四号まで表記されるが、第一巻第五号以降、読者の希望により削除される。

（注二）編集を担当した池内祥三のこと。

（注三）二一頁に「日名子実三作」の仏像の写真が掲載されている。

（注四）一九二七年四月号の目次には平山蘆江と記されているが、実際には息子の平山清郎が描いた。一九二七年五月号の「編集後記」に、「四月号表紙筆者を「平山蘆江」としたのは誤りで「平山清郎君」です」とある。

（注五）目次には、平山蘆江「雲の柱」とある。

（注六）尾崎秀樹「《日本の文藝雑誌》『大衆文芸』―第一次―」（『文学』一九六一年四月）

（注七）『大衆文学大系別巻　通史　資料』（講談社　一九八〇年四月）

（注八）早稲田大学図書館編『マイクロフィッシュ版早稲田大学図書館編精選近代文芸雑誌集　「大衆文芸」総目次』（雄松堂フィルム出版　二〇〇四年一一月）

（注九）白井喬二『さらば富士に立つ影―白井喬二自伝』（六興出版　一九八三年四月）

（注一〇）大村彦次郎『時代小説盛衰史』（筑摩書房　二〇〇五年一一月）

（注一一）真鍋元之編『増補　大衆文学事典』（青蛙房　一九六七年一一月）所収、「小史・その二」を参照。池内祥三の引き抜きについては、清原康正編「平山蘆江年譜」（『大衆文学大系5　前田曙山・本山荻舟・平山蘆江集』講談社一九七一年八月）にも指摘がある。

（注一二）伊東昌輝「長谷川伸年譜」（『長谷川伸全集』第一六巻　朝日新聞社一九七二年六月）

（注一三）浜田雄介編『子不語の夢―江戸川乱歩小酒井不木往復書簡集』（皓星

社　二〇〇四年一〇月）

（注一四）未署名「『大衆文芸』の創刊」（『読売新聞』　一九二五年一〇月一日）

（注一五）未署名「よみうり抄」（『読売新聞』　一九二五年一一月六日）

（注一六）未署名「よみうり抄」（『読売新聞』　一九二五年一二月二一日）

（注一七）江戸川乱歩「探偵小説四十年（上）」（『江戸川乱歩全集』第二八巻　光文社〔光文社文庫〕　二〇〇六年一月）

（注一八）青木武雄『報知七十年』（報知新聞社　一九四一年六月）所収、「小説読物と大衆文芸」

（注一九）池内祥三「編集後記」（『大衆文芸』　一九二六年八月）

（注二〇）池内祥三「編集後記」（『大衆文芸』　一九二六年九月）

（注二一）池内祥三「編集後記」（『大衆文芸』　一九二六年一〇月）

（注二二）池内祥三「編集後記」（『大衆文芸』　一九二七年一月）

（注二三）池内祥三「編集後記」（『大衆文芸』　一九二七年三月）

（注二四）湊邦三「二十一日会初出席の記」（『大衆文芸』　一九二七年五月）

（注二五）池内祥三「編集後記」（『大衆文芸』　一九二七年四月）

（注二六）池内祥三「編集後記」（『大衆文芸』　一九二七年六月）

（注二七）尾崎秀樹「《日本の文芸雑誌》大衆文芸―第一次」（『文学』一九六一年四月）

（注二八）二十一日会同人「〈広告〉大衆文芸」（『東京朝日新聞』夕刊　一九二六年五月八日）

（注二九）報知新聞社調査部編『大正16年　報知年鑑』（報知新聞社出版部　一九二六年九月）

（注三〇）小酒井不木書簡江戸川乱歩宛（一九二六年一〇月四日）浜田雄介編『子不語の夢―江戸川乱歩小酒井不木往復書簡集』（皓星社　二〇〇四年一〇月）。この書簡の注には、「『大衆文芸』の二十一日会は、メンバーが流行作家のうえに原稿料のない「タダ奉公」のため、原稿附則に悩ませられていた」とある。

（注三一）江戸川乱歩「探偵小説四十年（上）」（『江戸川乱歩全集』第二八巻　光文社〔光文社文庫〕　二〇〇六年一月）

（注三二）国枝史郎『名人地獄』（聚芳閣）、正木不如丘『嵐』（春陽堂）の広告。

（注三三）菊池寛「『大衆文芸』の人々」上中下（『読売新聞』　一九二六年一月一、五、六日）

（注三四）菊池寛「大衆文芸と新聞小説」（『中央公論』一九二六年七月）

（注三五）村松梢風「大衆文芸家総評」（『中央公論』一九二六年七月）

（注三六）齋藤龍太郎「年末追想録（下）」（『読売新聞』　一九二六年一二月二四日）。

（注三七）楠田敏郎「大衆文学の傾向（四）」（『読売新聞』　一九二七年三月六日）。

（注三八）長谷川如是閑「政治的反動と芸術の逆転」（『中央公論』　一九二六年八月）

（注三九）伊東昌輝「長谷川伸年譜」（『長谷川伸全集』第一六巻　朝日新聞社　一九七二年六月）。以下、長谷川伸の上演。映画の情報については、すべて当該資料による。

【附記】本研究はＪＳＰＳ科研費　２２Ｋ００２９８の助成を受けたものです。